

「ボランティア活動10年間を終えて」

——奈良国立博物館解説ボランティア——

伴 稔也（9期）



1. はじめに

新聞の片隅に「ボランティア募集」の記事を見つけて応募し、面接後採用されました。

その直後から事前講習があり、当館で展示される仏像、仏教絵画、経典、仏教法具・法衣等、こんなに広い範囲に及ぶのかと思うほどの知識を詰め込まれました。

「一体の仏像から伝わる事柄は20件以上あると心得よ」・・・名称の由来、製作時期、髪型、材料、製作者、補修状況、着衣、仏像の履歴、等々・・・。加えて、正倉院展、お水取り展、誕生中国文明展、天馬（ペガサス）展、など特別展のデスクにも座ることがあり、殷王朝からギリシャ神話まで広範囲の知識が必要とされ、資料室、図書館通いが続きました。

2年目くらいから少し落ち着いてデスクに座れるようになりました。

しかし、「こんなこと、知らんのか、学芸員呼んで来い！」とか、「前に来た時のガイドと説明が違う」とか、図録の間違いを指摘され、すぐに修正せよ、と言われたこともありました。大切なことは、知らないことは、知りませんとはっきり言うことだと体得しました。

そのような日々の中、印象深い出来事がありました。

2. 仏像館での出来事（1）

ある日の夕方のこと、中年の女性が入館されて、仏像一体ずつに立ち止まってじっと合掌しながら巡回されていました。デスクにいた私と目が合うと、私の方に歩いてこられ、

「仏さまにも役目のようなものがあるのでしょうか？」

「ええ、あります、身近で分かり易い仏像をご説明しましょう」と薬師如来像のところへご案内し、「病気を治すのに祈りする仏さまです」と。すると、じっと合掌されていました。

一分間ほどの長さなので、その後の説明も長引きそうだなと思いつつ、「何かほか



にお望みの仏さまはありますか」とお尋ねしたのですが、沈黙数分……。デスクへ引き返そうと思ったその時、ポツリと「三年前、病気で子供を亡くしました」

どう対応したらよいのか……。戸惑いながら地藏菩薩コーナーへご案内しました。

「子供さんを救ってくださる仏さま、地藏菩薩です」

その方はまた一体一体に合掌されています。



私は、口から「この仏像は、〇〇時代に作られ、材料は……」、「手の持っているものは……」、「展示されている仏像は、魂が抜いてある……」とか出そうに、いや、喉まで出かけたのですが、その方はじっと手を合わせ続けられています。私もつられて黙って合掌。

数分の後、「一緒に供養していただきありがとうございました」と私に向かって……。

「お宅の近くにもお地藏さまはたくさんあると思いますよ、路の角にも石のお地藏さまをよく見かけますし、もちろん、ここへ来てくださっても……」

「ありがとうございました。これからそうさせていただきます」とすっきりとした表情で帰ってゆかれました。

この間、約20分間ほど。不思議な時間を体験しました。解説ボランティアとしてこれだよかったのか。ちょっと目が覚めた感じがしました。

3. 仏像館での出来事（2）

2月のある夕方、もう誰も来ないな、と思って帰り風が吹きかけていた。そこへ一つの足音が入ってきた。その日はちょっと勝手が違った。まず普通のテンポで部屋を一周された後、後戻り、横歩き、小走りなどガサガサと数人分ほどの足音が続いた。

ふと目を上げると、コートを着た4~50歳の男の方と目が合った。「何かお気づきのことがあればご説明しますが……」と私。

「部屋に入った途端に、この仏像に引き付けられてしまい、どこの角度から見るのが一番魅力的かと、歩き回りました……」

「他の仏像は、どこかで名前を聞いたことがあるのですが、この降三世明王に初めてお会いして、何か妙に胸にぐっとくるものがありまして……」

「明王と言えば、不動明王のみかと思っていました」



私の知識の範囲で、簡単にご説明しましょう。この像は降三世明王坐像（ごうざんぜみょうおうざぞう）といい、河内長野市にある金剛寺というお寺のご本尊大日如来の脇侍で、本堂の修理に合わせて、当館に持ち込み修理した後の展示です。重要文化財です。（修理時の発見により、ご本尊と合わせて国宝に指定）

降三世とは、三界の王・シヴァ王（ヒンズー教の神）を降伏させた明王です。ですから、かなり霊力の強い仏様で、過去、現在、未来の三つの世界にはびこる三毒、瞋（しん）・貪（どん）・痴（ち）と呼ばれる煩惱を克服しようとする姿を現しています。

「瞋は、怒りで、貪は、むさぼり、は解るのですが、痴というのは？」
痴は、おろか、愚痴というほうが良いかと・・・

「つまり、この明王は、怖い顔でこの三毒を懲らしめるということですか？」

むしろ、私は、自分の中に生じる三毒を克服しようとするれば、このような形相になる、その葛藤に打ち勝つのは、並大抵ではないですよ、ということを表している・・・、打ち勝てば、菩薩や如来のような表情になれます。と解釈するほうが・・・。

「そうですね、私も工作中、生活中、何していても、三毒が心に湧き上がってくるのがしょっちゅうです。それをなんとか抑え込もうと思ってはいるのですが」

お仕事を聞いてもよろしいですか？

「病院で医師をやっています、对患者さん、医師同士の間で、また、上下関係の中で、三毒の話が飛び交っていますね、しかし、少なくとも患者さんとの間には、無くしたいものです。どのようにしたら三毒を降伏させることができますか？」

こう聞かれたら返す言葉がない。すぐに答えられない。他にどんな明王がありますか？と問われれば、他に「不動明王」「軍荼利明王」「大威徳明王」「金剛夜叉明王」とすらすらと言える準備はできているのに・・・。

仕方がない、「その答えがわかっていたら、わたしの顔は、この前の展示室で鑑賞された「菩薩」様達のようなお顔になっていますよ」と。

「そりゃそうですね、もし解っていても、他人には言えませんよね」

私の顔が歪んでいたかどうかは知りませんが、「私は、今新人研修医の教育を担当していて、カリキュラムの中に医者としての心構えというのがあり、ぜひ仏像館見学を入れたいと思います、引き受けていただけますか？」

もちろんです、前もって予約していただければ、解説員一同喜んでお迎えさせていただきます。とは答えたが、そのような場面で仏像が役に立つ、ということにびっくり、併せて、当日、私の担当日に当たってほしいような、当たってほしくないような気分だった。

4. 終わりに

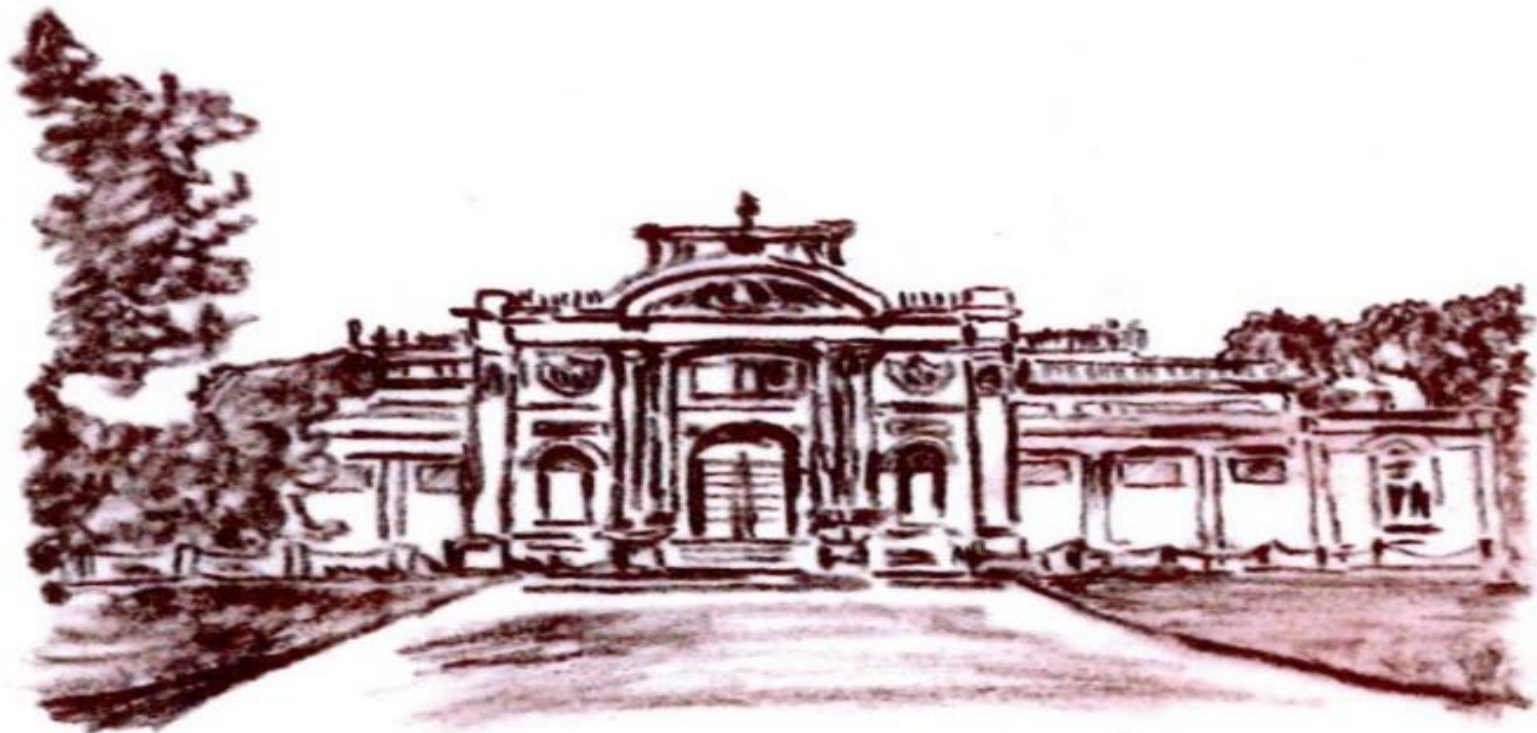
10年間、原則週1回、手弁当で勤めました。この間に得たものは、知識が増えたこと、今までと違う経験を持っているボランティア仲間と付き合えたこと、などありますが、やはり一番は、多くのお客様とのご縁だと思います。

10年間で、ざっと見積もっても3,000人を超す方々との対話、雑談の中から、その方の経験、想い、生き方、環境によって、3,000通りの仏像への接し方、理解の仕方があることを知りました。

5年経った頃からは、今日が、また新しい方とご縁ができるかと、ウキウキワクワクした

気持ちで過ごすことができました。

現在でも 20 人を超す方々にご縁をいただいている、私の大きな宝物になっています。



奈良国立博物館

(生い立ちなど)

昭和 14 年東京生まれ、松江で附小、附中、松高で学び、金沢大学工学部を卒業、大阪ガスに入社し専ら都市ガスの製造に従事する。65 歳で退職。

奈良県に住みながら、地元にも何も貢献していないとの反省から、奈良国立博物館に 10 年間、解説ボランティアを続け、現在は、万葉文化館でボランティア（現在はコロナ禍で休業中）をしている。

小学 3 年時、図工の先生から木版画を褒められ、爾来 70 年、「仏像の美を版画に写す」をテーマに版画を続け、奈良県美術展で 10 回入選する。地元で、妻（洋画）と「ふたり展」を隔年に開催し、令和 2 年 3 月、9 回目を終えることができた。



奈良県美術展版画入選